

それで、本書が、高等学校や大学の教科書として、少しでも多くの人に見られる機会を得たいと願っている。頭注もそういう場合を考えて付したところが多い。

昭和五十三年一月二十四日

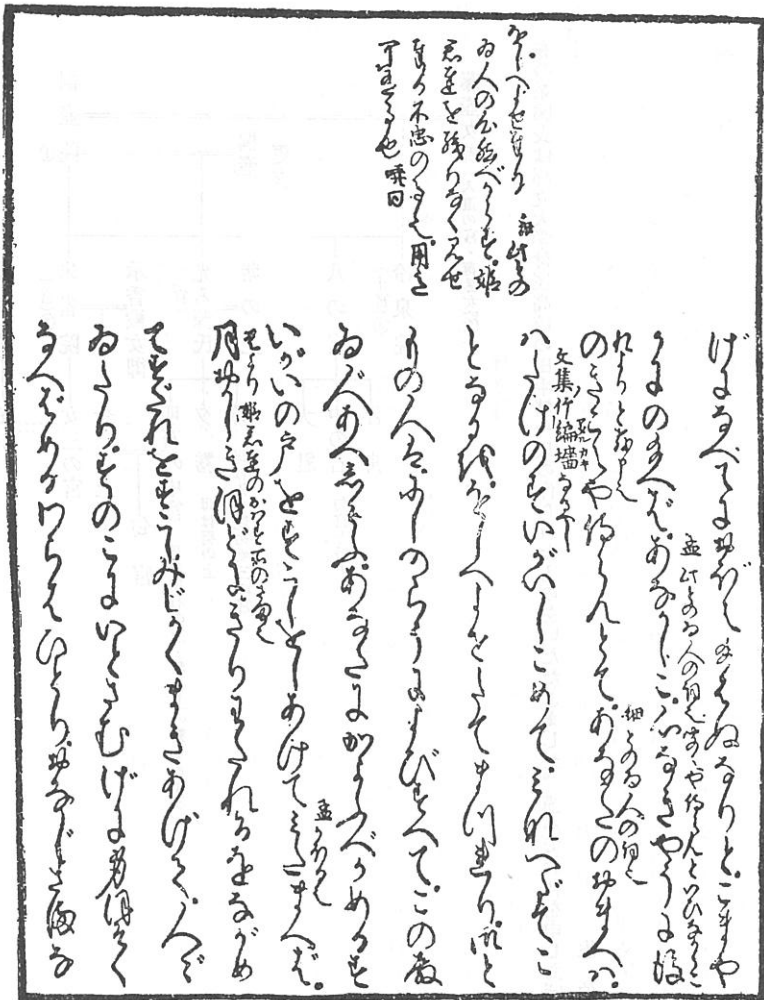
佐伯梅友

四

目次

凡例	三
本冊読者のために	六
本文	
一 橋	九
二 とはの別	三
三 昔のあ	三
四 人ふたり	四
五 風のたより	四
六 道ひとすぢ	六
注	七
源氏物語について	八

湖月抄「橋姫」の巻影印



湖月抄本 橋 姫 (本書一三頁六行目から)

橋 姫

一 十四歳で元服した。

二 気がおけるほどりっぱで。
三 体臭である。

女三の宮の若君は、元服して、今はもう右近の中將になっている。

この君は、まだしきに世のおほえいとすぎて、思ひあがりたることこよなくなどぞものし給ふ。げに、「さるべくていとこの世の人とはつくり出でざりける、かりに宿れるか」とも見ゆること添ひ給へり。顔かたちも、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あな清らと見ゆる所もなきが、ただいとなまめかしう恥かしげに、心の奥多かりげなるけはひの、人に似ぬなりけり。香のかうばしさぞ、この世のにほひならず、あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、遠くへだてたる程の追風も、まことに百歩の外もかをりぬべきこちしける。(匂宮)

というのがその有様である。このため「薫」と呼ばれる。親友は紫の上が養子にして宮中に入れた「明石の中宮」の腹の兵部卿の宮で、薫にはりあって、いつもすぐれた香をたきしめていられるので「匂宮」といはれる、花やかな色好みの方である。

藤壺の入道の宮の腹で朱雀院の譲りをうけられた帝は、ずっと前に位を退かれて「冷泉院」と申しあげる。その中宮は秋がおすぎで「秋好中宮」といわれる方、六条の御息所の御腹の前坊のみ子で齋宮となられた方であり、源氏の後見で入内せられたのであるが、み子はおありでなかった。今上は、朱雀院のみ子で、冷泉院の御即位以来、春宮となつていられた。匂宮はその第三皇子である。